ウクライナ情勢をどう見るか

隣国のスラブの大国ウクライナが揺れ動いている。毒を盛られ二ヶ月で様変わりした大統領候補ユシュチェンコの容貌も、この国の激しい政治情勢を物語っている。ソ連解体から十三年。ウクライナはどこに向かって進むのだろうか。

想い出

ウクライナには想い出がある。二〇歳の大学生の時、通訳のアルバイトで、この近辺を回る機会があった。あのチャウシェスクがルーマニアの第一書記になって間もない頃で、三日間のルーマニア縦断旅行を終えて、景勝地ブラショウからウクライナ国境で列車に乗り換え、キエフ経由でハリコフに一泊した。ウクライナの穀倉地帯を見学するというので、見渡す限りの花畑をバスに揺られ、農家でご馳走になった。ハリコフから、また列車でモスクワに向かい、今はマフィアのたまり場になっているが、当時は近代的なホテルとして新築されたばかりのロシアホテルに宿泊した。赤の広場の裏にある大きなホテルだ。帰途、ナホトカから新潟沖に到着して、ソ連のプラハ侵入を聞いた。一九六八年夏のことだ。

そのウクライナがソ連から独立して間もない一九九一年から数年の間に、何度かウクライナを訪問した。キエフの街には、ドニエプル河が流れている。河を挟んで一方が高台の旧市街で、川向こうの低地が新興の住宅地になっている。地形は何となく、ブダペストと似ているが、キエフの街はブダペストよりも人口が多い大都市なのだ。

ソ連を構成していた共和国が独立して、現在のウクライナが生まれた。キエフ大学の学生たちが会社を興し、ビジネスを始めていた。官庁には二〇代から三〇代の大臣や次官が就任した。しかし、間もなくマフィアや盗賊が跋扈しだした。物不足であらゆるものがビジネスになった。物があれば売れる。だから、売れる商品は輸入するか、盗むしかなかった。

若いビジネスマンたちに、日本の会社を紹介した。オーストリアの保税倉庫で現金購入した商品をハンガリー国境まで運ぶ。国境の向こう側にはキエフから来たトラックが待っている。トッラクが丸ごと盗まれるのは日常茶飯で、列車の貨車までも盗まれた。だから、武装した自警団を乗せて、自前のトラックがキエフまで運ぶ。キエフの会社の事務所には、非番の警官がアルバイトで警備の仕事をしている。それでも、九二～九三年頃はまだ夜でも一人でキエフの街を歩けた。ボデー・ガードを付けてくれたこともあったが、まず危険な目には会わなかった。

キエフから飛行機や列車で、港町オデッサを三度訪れた。横浜と姉妹都市を結んでいるオデッサには日本友好協会があり、サハリンから移住した日本女性も住んでいた。国内線の空港は、寂れたバスの発着場のような感じだった。キエフからプロペラ機で一時間ほどだが、この頃は飛行機の貨物室にまで乗客を乗せていた。チップを受け取って搭乗を許可したパイロットとスチュワーデスが口論して出発が遅れた。しかし、貨物室に一〇名ほど乗せたまま出発した。乗客名簿などないから、墜落しても誰一人身元を確認することはできなかっただろう。

オデッサは無声映画「戦艦ポチョムキン」の舞台になった港町。建築物としてはヨーロッパでも有数のオペラハウスがある。リヒテルが育った歌劇場だ。五月の公演を一幕だけ覗いたが、五〇名ほどの観客しかいなかった。劇場を維持するのが難しいことが分かった。人々はオペラどころではなかったし、西側の観光客を呼び込む力もなかった。

オデッサからは黒海の諸都市をめぐる各種のクルージングが出ている。途中で下船することも可能だ。軍港で知られているセヴァストポリを経て、クリミア半島のヤルタで降りた。ヤルタはいわばロシア人の避暑地だ。より正確に言えば、冬が長いロシ人が夏の太陽を求める迎暑地なのだ。モスクワから大挙してヤルタなどのクリミア半島の街に押し寄せる。しかし、ヤルタの街には商品を売っている店がほとんどない。観光地だからいろいろな店があってもよいのだが、会社や政府機関の保養地は三食付きだし、社会主義で民間事業が許されていなかったこともあって、不特定多数のお客を相手にする商売が存在しないのだ。あれから一〇年経っているが、それほど変化はないと思う。

ヤルタに一泊し、翌日はタクシーで、バフチェラサイを経由して、シンフェロ―ポリ空港へ向かった。

タタールのくびき

ハンガリーが長い間トルコの支配下にあったように、スラブ民族も長期にわたってモンゴルの支配下にあった。ロシア史の中で、この時代は「タタールのくびき」の時代として記されている。

一三世紀初め、ジンギス汗を次いだオゴタイがロシア征服を目指し、バトゥを司令官とする部隊を西方に送り出した。この部隊がキエフを攻略した後、ハンガリーとポーランドにまで侵入した。一二四一年のことである。オゴタイ死去の報で部隊が退き、ヴォルガ河のサライに建設したのがキプチャク汗国である。以後、ロシアは二〇〇年にわたって、モンゴルの支配下におかれた。

モンゴルによるロシア支配の意味は現代でもいろいろに解釈されている。モンゴル帝国による支配が、その後のロシア帝国の反攻支配を生み、近代のツァー・リズムやスターリニズムを生んだのではないか。「エリツィンはどう見てもロシア人ではなく、タタールだ」というような噂が流れるのも、モンゴル支配がロシアの近代史の中で占める大きさを物語っている。

バトゥ死去の後、キプチャク汗国は各地の小汗国に分裂し、クリミアにはクリミア汗国ができた。これがクリミア・タタールの発祥である。クリミア・タタールはモンゴルの末裔だが、やがてオスマン・トルコの支配に入り、トルコとの混血が始まる。その後、近代国家として体制を整えたロシアがエカチェリーナの時代に南方征服を試み、一八世紀末にクリミアを手に入れるが、以後、トルコとの間でクリミアをめぐる闘いが続けられた。

クリミア・タタールの末裔はスターリンによって中央アジアへ放逐され、クリミア・タタールの痕跡はほとんど消し去られた。ただ一つ、クリミア汗国の首都だったバフチェラサイには、廃れた木造の宮殿が残されている。

分裂するウクライナ

フルシチョフ時代にクリミアはウクライナに割譲された。しかし、ウクライナの独立によって、クリミアの帰属問題が再熱した。ウクライナがロシアと一線を画そうというなら、ロシアが支配する黒海艦隊の基地セヴァストポリの帰属だけでなく、クリミア全体の帰属を問題にすべきではないか。少なくとも、クリミアは自治共和国であるべきだという主張が出てきた。クリミアは歴史的に見ても、ロシアのものだという訳である。そして今、ウクライナのＮＡＴＯ加盟が課題になってきた段階で、西ウクライナが西欧との協調体制を目指すなら、クリミアだけでなく、ロシア人が多数を占める東部ウクライナはロシアとの協調を目指す自治共和国であるべきだという主張が出てきた。

ここにはいろいろな思惑が込められている。ロシア側から見れば、バルト三国までのＮＡＴＯ加盟は認めても、スラブの大国ウクライナを加盟させる訳にはいかない。ここはベラルーシを含めたスラブ三国が結束し、スラブの利益を守る必要がある。

他方、ウクライナ側から見ると、市場経済改革が進まない現状では、ロシアからのエネルギー代金も満足に支払えない。ロシアからの独立を強調した時期には債務の支払いが催促された。ところが、ロシアとの協調を目指したクーチマが大統領に就任してから、ロシアとの関係が改善し、エネルギー供給が安定してきた。

こうして、いったん自立したはずのウクライナに、再び旧体制の親ロシアの政治家が台頭してきた。改革派は野に追いやられた。しかも、そのロシアとウクライナの旧体制を生きてきた政治家たちは、赤いマフィアと結託して国家資産を詐取し、殺人まで平気でおかす連中だ。親ロシアになって、再び腐敗がはびこり、政治家の腐敗批判を強権的に抑える政治が復活してきた。この点では、ロシア、ウクライナ、ベラルーシは、同じ方向を向いている。

ウクライナへの天然ガス供給を握っているのはロシアの国営企業Gazpromだが、この巨大企業はプーチン大統領の権力基盤でもある。ガスプロムの一部の幹部が、ウクライナのガス会社幹部や政治家と組んで、ガスプロムがウクライナに供給するガスの売上代金を「合法的」に詐取している。その一つの仕組みが、ハンガリーに設立した幽霊会社Eural TGを経由する巨額資金の横領である（『ハンガリー・ジャーナル』二〇〇四年一月号参照）。この巨額詐取スキームには、クーチマ大統領とウクライナ出身の大物ロシア・マフィアのモギレヴィッチが噛んでいる。

そのことをGazprom幹部やプーチンは見て見ぬふりをしている。

首都キエフを中心として、若い人や知識人が怒りを上げているのは、こうした腐敗したウクライナの旧体制の政治家による支配なのだ。東部の炭坑夫や農民たちには良く事情が分からないから、旧体制の親分の言うことを信じている。

クーチマ大統領の腐敗を批判していたジャーナリストが暗殺された事件では、クーチマの殺人指令の電話が盗聴されている。大統領候補ユシュチェンコは二〇〇四年九月に、秘密諜報部の幹部と会食した後に、原因不明の病気にかかり、ウィーンの病院で治療を受けた。わずか二ヶ月で容貌が様変わりした。政府側は食べた寿司が悪かったと言っているが、Nature誌のサイトでは毒物学の専門家ジョン・ヘンリーが、ダイオキシンによる中毒現象に特有の症状だと断定している。強い毒性をもっているので、少量のダイオキシンを仕込むだけで良い。実験室あるいは工業的に作られたダイオキシンが利用されたと考えられる。ウクライナを含めた旧ソ連の秘密警察はいまでもいろいろな暗殺手段を保有しているということだ。

ロシア派が勝つにせよ、改革派が勝つにせよ、ウクライナが抱えている難しい課題は簡単に解決しそうにない。国民経済の立て直し、エネルギー供給問題の解決、民族的・地政的分裂の回避は、どれをとっても一朝一夕で解決しない問題ばかりだ。

（二〇〇四年十二月、盛田　常夫）